群島世界のセシル

じじぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
群島世界のセシル

【Ｎコード】
Ｎ２３３８Ｚ

【作者名】
じじぃ

【あらすじ】
いくつもの島が密集し、島１つごとに１つの国家が形成されている群島世界。
いまだに世界の果ては解明されておらず、人は世界の果てにあるとされる「大陸」に夢を馳せる。
そんな群島世界で暮らすセシルは軍事学校に通う女子学生。学校の軍事訓練以外には変わったところの無い普通の女の子だった。

そんな彼女の前に現れたルイスという名の少年。
感情を失くしたというルイス。
「俺は――大陸から来た」
どうやら過去に会ったことがあるらしい二人。
ルイスが大陸からやってきた目的にセシルは巻き込まれていく。

※小説を書くのは久しぶりなので文章等おかしいところがあるかと思いますが、よろしくお願いします

序章

その日も、いつもと何も変わらない一日だと思っていた。
まだまだ未成熟な八歳の体を限界まで痛めつけ、精神を極限まで追い込み、後はただただひたすら泥のように眠る。そんないつもと変わらない自分にとっての日常が、その日も来ると思っていた。
だがその日は違った。
いつものように訓練が退屈になると、闘練場の横にある庭に逃げ出す。そこで何をするでもなくただひたすらに流れる雲をぼんやりと眺めるのが好きだった。
その日もそのつもりで庭に行った。ところどころに木が植えてあるものの、その他には闘練場以外なにも遮るもののない広い草原が広がって、遠くの方には名前の分からない山が連なっている。
そこに彼女はいた。
腰のあたりまで伸びた金色の髪に奥の方まで見通せそうな、澄んだ蒼い瞳。滑らかな白い肌はその少女の清らかさを表しているかのようだった。
少女は自分が近付いてもこちらに気づくことなくただ空を眺めている。
いつも自分がしているはずの行動を彼女がやっているのを子供ながらに気に入らなくて、邪魔してやろうかと声をかけた。
「？」
ゆっくりと振りむいた少女は不思議そうに首を傾げながらその蒼い瞳を自分へと向けてくる。横顔を見ていたときから感じていた少女の整った顔立ちに少し緊張しながら、ここで何をしているんだと問いかける。
「何か怒ってるの？」
自分の問いかけからとげのようなものを感じ取ったらしい少女はまたも首を傾げ、こちらの顔を下から覗き込んでくる。

「！」
普段なら知らない人間に不用意に近付かれるような失敗はしないはずなのに、なぜかその少女には簡単に接近を許してしまう。
そんな自分にとっての失敗と、少女から香る甘い匂いのせいで自分の思考が余計に鈍くなっていくのを感じていた。
「何か怒ってるの？」
自分が返事をしないのをちゃんと聞こえなかったからだと思ったのか、少女はもう一度問いかけてくる。
違う。それだけの言葉を言えればいいのに、なぜか自分の口は思うように開いてくれない。この施設で暮らす、大抵の大人たちには子供とは思えないほどに堂々と言葉を発することができるのに、同い年くらいの少女にたった三文字の言葉すらうまく言えないとはどういうことか。
それでも何とか言葉をひねり出して、自分が怒ってはいないことを伝える。
すると、その言葉に安心したのか、少女は笑みを浮かべながら
「遊ぼう？」
と聞いてくる。
その笑顔になぜだか余計に鼓動が速くなって自分がどうなってしまっているのか分からなくなった。
「遊ばないの？」
思わず顔をうつ向けた自分の反応を少女は拒絶と受け取ったのか、瞳は悲しみの色で翳ってしまう。
少女をそんな表情にした自分がなぜだか許せなくって思わず大きな声で否定した。
その大声に少女は一瞬びっくりしたような顔をするが、一緒に遊べるんだとすぐに理解してまたも可憐な笑みを浮かべながら走りだす。
「おいかけっこしよう」
この広い庭では他にすることもないだろうと思ったのか、少女は

相談をすることもなく走っていく。
長い髪をなびかせたその後ろ姿を眺めながら考える。
体をあちこちいじられて、更に普段から地獄のような訓練を積んだ自分が本気で走れば一般の大人にすら負けない。その化け物じみた能力を見せれば少女がおびえた表情をするのではないかと。
それを考えただけでなぜだか急に怖くなって、自分の能力に制限をかける。これで自分の限界は八歳の子供相応の体力になる。
そんな長い思考を終えて顔を上げると、いつまでも追ってこない自分を不思議に思ったのか少し離れた位置から少女が自分を見つめていた。
また少女が悲しい表情になるかもしれないと思い、普段ならしない笑みを浮かべて彼女の方へと走り出す。
その行動に満足したのか、少女も笑みを浮かべながらまた走り出す。
少女はその可憐な見た目とは裏腹に子供にしては速い足で軽快に駆けていく。その速さは普通の子供と同じぐらいの体力になった自分にはちょうどいい。
久しぶりに子供らしく遊んでみるとなぜだか笑いが止まらなくて、少女と一緒に土にまみれながら転げ回った。
見上げればこの施設の飛行士たちが飛行訓練をしているらしく、甲高い音を発しながら戦闘機が風を切り裂いていく。
「楽しい？」
少女は満面の笑みを浮かべながら、問いかけてくる。
自分は楽しいのだろうか？　普段なら大人に囲まれてずっと訓練をしているはずだ。
だが、今は同い年くらいの少女と馬鹿みたいに笑いながら転げ回っている。
楽しいのだろう。自分の感情をそう判断することにした。いつもなら笑うことも泣くことも怒ることもないはずの自分が、今日に限って笑っている。

この少女のおかげなのだろうか？
横で楽しそうに笑う少女の横顔を眺めながら考えてみる。すぐに物事の答えを出すはずのいじくりまわされた頭は、それでもいっこうに答えが出ない。出ない以上考えても仕方ない。そう決めてまた少女と走り出す。
思えば、
この時から春宮ルイスは感情というものに執着するようになったのかもしれない。

一章~１~（前書き）

基本的に短めの文章で投稿していこうかと思います。
一つの章を場面転換ごとに投稿していく感じです。

一章~ 1 ~

まだ冬というには風が冷え切っていない季節。
衣替えからもすでに何週間か経っていて、ゆっくりとしかし確実に過ぎていく今年に、大抵の学生はいつもと変わらない秋を特に何を考えるでもなく過ごしていた。
ちょうど昼を過ぎた時間帯で、真面目な学生は何とか眠気を堪えながら教師の退屈な話を聞き、不真面目な者はそうそうに授業を聞くのを諦め夢の世界へと旅立っている。
「この世界は『群島世界』と呼ばれ、ある程度の規模を持った二十八の島国が密集して成り立っている。このリヴァルがあるイグリスもその一つだ」
眼鏡をかけた初老の男性教師は、寝ている学生は目に入らないらしく、世界の構成について眠気を誘うようなテンポでゆったりと語っていく。
「おおよそ島一つに国一つのバランスでそれぞれの国家は形成され、それぞれの国家間の行き来は盛んだ。しかし、群島世界の他には未だに陸は発見されていない。科学者たちの話では海を越えた向こうに『大陸』と呼ばれる大きな島が存在するらしいが、まだその長大な海を越えられたものは歴史上一人もいない」
この教師は世界の成り立ちについて話すのが好きらしく、授業の進行度合いとは関係なくこの話は何度も聞いているのだが、そんなことはお構いなしに教師はゆっくりと語る。
そんな教師の声を意識の遠くに聞きながらセシル・マクファーデンはぼんやりと空想の世界に浸っていた。
教師の語る遥か遠くに存在するという大陸。
この小さな群島世界という枠を飛び出して自分が大陸に渡る夢。
空にはきっとセシルの思いもしないような飛行機が飛び交っているだろうし、もしかしたらすでに宇宙に飛び立っているのかもしれ

ない。
　海には大型の戦艦が何隻も行き交い、自分たちの国を油断無く守っているのだろう。
　街には石畳の整然とした大通りが真っ直ぐに伸び、その両脇には背の高い尖塔が立ち並び、景観を守りつつ様々な色をした家々が所狭しと並んでいる。貧しく路上で夜を過ごす者など一人もおらず、誰しもが大きな家に住み小奇麗な服に身を包んで、堂々とした足取りで楽しそうに街を歩いていく。
　そう空想するセシルの頭の中の大陸は、見たことも無いはずなのに不思議とリアルな質感を持ってきっとそれが本当なのだという雰囲気を与えてくる。
「……つまらない」
　思わずぼそりと呟くと
「おい、マクファーデン。セシル・マクファーデン」
「へ……？　あっ、はい」
　そのタイミングで初老の教師に呼ばれる。
　セシルが立ち上がると一斉にクラスの視線が集まる。
　原因はその容姿にあった。
　今年で十五歳になるが、その見た目は着実に大人の女性へと近づいていっている。腰まで伸ばした長い薄茶色の髪は自慢の一つで、クラスの中でも羨ましがられることが多く、その透き通った蒼い瞳と相まって清らかな雰囲気を醸し出す。彼女が儚げなため息をつけば、周りの人間が一斉にその身を案じるほどだ。その小柄な体躯は男性の庇護欲をそそり、気付けば入学してからのこの半年間で学年の半数の男子に告白されるという事態を招いていた。
　おかげでこのクノー高等学校にはセシルのことを知らないという人間は一人もいない。
「群島世界で一番大きな国はどこだ？」
　しかし、そんなセシルの美貌も教師には関係なく、ぼんやりとしていた代償とでも言うように質問を浴びせてくる。

「えーと……アメリア王国です」
「……正解だ」
ぼーっとしていたはずのセシルが正解を答えたのが気に食わないのか、教師は少し憮然とした表情を浮かべる。
そこでセシルがにっこり笑ってみると
「ッ！　マクファーデン、早く座りなさい！」
「はい」
若干顔を赤らめて黒板の方へ向いてしまった。
周囲からはおーっと歓声のような声が漏れる。
セシルが周りから好かれる理由にこの表情があった。
普段は内気な雰囲気で活発ではなさそうなのに、次の瞬間には笑って元気よく駆け出している。このコロコロと変わるセシルの表情や仕草に周りの人間はなぜだか強烈に吸い寄せられた。
その理由はセシル自身も分からないのだが、場合によっては情緒不安定にも見えるはずのそれがセシルにとっては魅力の一つになっているのだ。
今日もまたその可憐な笑顔で男性教師をやりこめたセシルはやはりクラスの中心だった。
セシルが着席するとタイミングよく授業終了の鐘が鳴る。
「では、今日の授業はここまでとする。解散」
この日の授業はこれで最後で、セシルは友達と帰り支度を始めた。
「ねえねえセシル」
「ん？　なに？」
鞄を持ち上げたところで声をかけてきたのは右隣の席に座るナタル・クリングだった。
「今日さ、街に買い物に行こうかと思ってるんだけど、一緒に行かない？」
「行く行く」
セシルは笑顔で答えてナタルと一緒に教室を出た。

一章~2~

「はーあ、何で軍事訓練なんてやらなきゃなんないだろうね」
両側を活気のある商店が並ぶくすんだ色の石畳を歩きながら、ナタルは愚痴をこぼす。
「しょうがないよ。だからこそ学費免除なんだし」
「そうだけどさ」
二人の通うクノー高等学校は国により運営されている。
代わりに、入学したての一年生には軍事科目の履修が必須条件になっていた。
国を守る軍人への尊敬と感謝の念を忘れないためだと政府は振れ回っているが、実際は島同士が密集した群島世界の情勢が非常に危ういバランスで成り立っているため、有事の際に学生にも戦わせようというのっぴきならない事情によるものだ。
「まあ、それも一年の辛抱だよ」
しかし、二年になれば軍事訓練とは関係のない普通科もあり、軍事演習をしなくて済む。
「あー、早く二年にならないかなー」
「無理だよ。時間早く進まないし」
茶色い髪を揺らしながら大きく伸びをしたナタルは、尽きることのない軍事演習への不満をこぼしていく。
「でもさあ」
そんなナタルを横目に見ながら
「私は二年になったら海兵科か空兵科に進もうかと思ってるんだよね」
セシルは苦笑いをこぼす。
「えっ！？　セシル軍事科へ進むの！？　やめときなって！　セシルはそんなキャラじゃないでしょ！」
それに対したナタルの反応はもちろんといえばもちろん、セシル

の予想した通りの猛反対だった。
「いやだって……」
「だってもなにもないよ！　ていうかどうして軍事科へ進もうとか思ったの！」
セシルの発言があまりにも衝撃的だったのか、ナタルの声はあたりの商店へ響き渡っている。
そのせいで周りから不用意な注目を集めてしまい、セシルはほほを赤らめながら縮こまった。
「わたしね……大陸探査部隊に入りたいんだ」
「……えっ？」
それでも何とか出した声はナタルにとってさらに衝撃的なものだった。
「大陸探査部隊って……大陸探査部隊！？」
そして、一拍遅れてやってきた反応は先ほど以上の猛反対。
「大陸探査部隊って、あの帰ってこれるかも分からない上に帰ってきても海のあまりの厳しさにみんな衰弱して帰ってくるっていうあの過酷なあれでしょ！　あなたそのほっそい腕でどこに行こうとしてるのよ！」
「そのほっそい腕って……」
この群島世界においてはまだその全容は解明されていない。
しかし、世界を解明しようという動きがないわけではないのだ。
それぞれの国が独自に探査部隊を編成し、この海の先にあるという大陸を発見しようと我先にと争いを続けていた。
その探査部隊は一部の探検家と軍人で構成され、クノー高等学校の海兵科と空兵科を卒業した学生も志願すれば参加することができる。
だが、その多くは群島世界には帰ってこれず、また帰ってきても食糧が尽きて大陸を発見する前に戻ってくることが多い。
その上、帰ってきた軍人や探検家たちは過酷な海の旅で廃人寸前の状態となっているのが当たり前の状態だった。

この群島世界に住んでいれば誰しもが知っている諸々の事情を鑑みれば、ナタルの反応も当然のものと言えた。
「だって、自分の目で見てみたいの。大陸の姿を」
「大陸の姿ねえ……」
いつも大陸について夢想しているセシルと違って、ナタルには大陸に対する明確なイメージが無いらしくどうもピンと来ない顔をしている。
「でもさあ、その大陸に着くまでに死んじゃうかもしれないんだよ？　今まで屈強な男の海兵や空兵が何人も挑戦して断念してきたんだよ？　それをセシルができるわけ？」
「……」
確かにナタルの言うことはもっともだ。
今から訓練を受けていくとは言え、セシルの体はどう見ても過酷な環境に耐えられる類のものではない。
言い方に若干のきつさはあるものの、それはナタルの友人としての心配から来るものだ。
「でも、わたしには家族いないから誰にも心配かけないし……」
セシルには家族がいない。物心がついたときには両親はおらず、いるのは祖母と自分だけだった。
そんなたった一人の家族である祖母が他界したのが去年の冬で、ゆえにセシルには家族と呼べるものがいない。
元々、クノー高等学校に入学したのも軍事科があるからではなく、無料で学校に通え、さらには寮まであり生活に困らないと言うところが大きかった。
「でも、わたしが心配する」
「ナタル……」
友人の身を案じてくれる言葉にセシルは感謝を感じた。
しかし、
「でもやっぱり、わたしは行きたいの。大陸へ」
その思いは変わらない。

頭の中に浮かぶ鮮明な大陸の映像。それが事実なのかどうかを自分の目で確かめる。どこまでも広がる夢を諦めることはセシルにはできなかった。
「……そこまで言うならいいんじゃない？　自分がやりたいことは積極的にやった方がいいし」
少し困ったように笑いながらナタルはセシルの判断を認めることにしたようだ。
ナタルはでも、と前置きしたうえで
「これだけは覚えておいて。セシルが無茶をしたら心配する人はたくさんいると思う。わたしだってそのうちの一人だし」
「ナタル……」
人差指でセシルの胸を指しながらにっこりと笑う。
ナタルの優しさにセシルは思わず声が詰まった。
「と、とりあえず、この話は終わりにしよう？　ねっ？」
「うん」
セシルの感情の起伏が激しいことをナタルは知っているので、セシルが泣かないようにナタルは大陸についての話を断ち切る。
ここにもナタルの優しさを感じ思わず泣きそうになるが、すでにナタルの大声で周りに大分見られており、余計に注目されるのも困るので何とか堪えた。
「ほら、一度落ち着いてさ。あそこの喫茶店でお茶でも飲もうよ」
「そうだね」
ひとまず、座って気分を落ち着けようと思った二人は近くにあったオープン形式の喫茶店の席に座る。
店員に紅茶とケーキを二つずつ頼むとセシルは空を見上げた。
「そういえば、最近よく飛行機が飛んでるよね。何かあったのかな？」
「さあ？　噂によると空兵科の軍人訓練も回数が増えてるらしいし」
そこには七機の編隊が行き交っており、地に響くようなプロペラ音を町に振り撒いている。

「これも噂なんだけどさ」
ナタルは街の色々な噂を集めるのが趣味らしく、その情報は根も葉もない物から信憑性の高い物まで、様々な種類に及ぶ。
「なんか陽ノ元（ひのもと）帝国に飛行機が墜落したらしいんだ」
「それが最近の飛行訓練とどう関係あるの？」
話をするのがうまい人間というのは話を円滑に進めるために巧妙に相手に質問をさせる。要するに、肝心なところをぼかして、気になった相手に突っ込ませる。ナタルも話し上手な人間の部類で、うまく会話を自分の持っていきたい方へと誘導していた。
「それがさ、群島世界じゃ見たこともない形の飛行機だったらしいんだ」
「見たこともない……？」
「そう。プロペラ　がついてないらしいよ」
「プロペラがなくてどうやって飛ぶの？」
群島世界の飛行機や飛空挺にはプロペラが付いているのが当たり前だった。今のところ飛行機を飛ばす際の推進装置としてプロペラを使用したものが主流となっている。
「だから、最初はそれが飛行機かどうかも分からなかったんだって」
「へえ。って、何でナタルはそんなこと知ってるの？」
「……フフッ。秘密」
「……」
少し影のある笑みを見せたナタルは情報ソースを教えるつもりはないようだ。セシルは時々、この友人に何か危ない物を感じる時があるが、それについては言わない方がいいだろう。
ナタルの笑い顔に思わず閉口したところで、頼んでおいた紅茶とケーキが運ばれてくる。
「やっぱりここのケーキは甘くて紅茶に合うわー」
一口ケーキを食べたナタルは思わず表情を崩す。
「……変な噂話とかしないでそうしてたら可愛いのに」
思わずセシルが言葉をこぼす。

確かに、クリームをたっぷりまとったケーキを口にしながら笑みを浮かべるナタルは、先ほどの怪しい笑いを浮かべていた人物と同じには思えない。
「えー、かわいいとかセシルが言っちゃうわけ？　セシルの性格を知ってるから違うのは分かってるけどさ、それって人によっては皮肉に聞こえちゃうよねー」
「……って言われても」
「入学半年で学年の男子半数の心をへし折ったくせに」
「……」
にやにやと笑いを浮かべながらナタルが言っているのは、不本意ながら自分が作ってしまったらしい伝説の話である。
「まさか、現実にそんなことあるわけないと思ったけど、今でも傷心の男子は数増やしてるもんねー」
「やめてよ」
今でもセシルのもとには、前ほどではないにせよ未だに多くの男子が思いを伝えに現れる。
彼らには悪いが、正直迷惑なことこの上ない。
「しかも、最近じゃ上級生すら来てるみたいだし」
「やっと同学年の男の子たちが収まったと思ったのに……」
最近になってセシルに告白しに表れるのは、一年生の動向をうかがっていた上級生の男子たちである。
自分より年上の相手ともなると断るのもそれなりに大変で、彼らは年齢の関係上プライドが高い。下手な断り方をすると後々面倒が起こりそうなのだった。
「セシル。モッテモテー」
「……さすがに怒るよ」
「はーい」
いつまでも同じねたでセシルをからかっていたナタルだが、本当に機嫌を損ね始めたセシルに引き際を悟り、悪びれなく舌を出す。
「まったく、私だって好きでこんな状況になってるわけじゃないの

に……」
「だから、私が断り方を教えてあげてるんじゃないの」
「そうだけど」
そう、あまり異性が得意ではないセシルが男子たち、特に上級生をうまくかわせているのは、ナタルに断り方を教わっていたからだった。
「まあ、あんまり男どもがうざったいとセシルとも遊んでられないしねー」
「それは感謝してるよ。でも、何でナタルはそんなに男の子に慣れてるの」
「フフフッ。それはね……」
「いいよ。どうせ秘密でしょ？」
「……ご名答」
自分が言うはずだったせりふを先に越されてナタルは少し不服そうな顔をした。
「それよりも、飛行機だよ飛行機」
「あっ、そんな話だっけ？」
ちょうど冗談交じりの会話にも一区切り付いたと思ったのか、セシルは話をかなり前に戻す。
「そうそう、何でプロペラが無いのに動くか、って話だよ」
「そうだそうだ。思い出した」
「とにかく、早くしてよ。気になってるんだから」
わざとらしく相槌を打つナタルに、セシルは話の続きをせがむ。
「はいはい。……で、そのプロペラが無い飛行機だけど、どうやら機体の後ろに推進装置が付いてるらしいの」
「機体の後ろって、プロペラが付いてるとしてもイメージ沸かないんだけど」
「わたしも話としては知ってるけど詳しいことは分からないんだけど、燃料らしきものがその後ろにある機械に供給されているようだったから、おそらくそこが推進装置だろうってわけ」

「まだ確かなことは分からないのかぁ……」
「ただこれも噂ではあるけど、その推進装置は少なくともレシプロじゃないらしいよ」
群島世界の飛行機は推進装置はプロペラであるため、一般的にレシプロと呼ばれる原動機が使用されている。今のところ、加速性能や上昇性能、格闘性能を考えるとレシプロ機が最も高い性能を誇っていた。
「レシプロじゃないって、ますます分かんなくなっちゃうよね」
「だから、わたしもただの噂だと思ってる」
すでに二人の会話は他の学校の女子高生ならば絶対に分からない話になっていたが、クノー高等学校の生徒であるので特に何の疑問もなく話をしていた。
「で、ここからが本題なんだけど」
「何？」
「その飛行機らしきものは、どうやら大陸製じゃないかって話なのよ」
「！　大陸製！？」
「セシルって何事にも心から驚いてくれるから話しがいがあるわ」
話の流れを考えればそうおかしいものでもないはずのナタルの発言に、セシルは心の底から驚いたという声を上げる。
「でも、大陸にはこっちからはまだ一回も行けてないじゃない」
「いや、それがさセシル。よく考えてみてたらそうとは言えないわけよ」
「何で？」
大げさな身振り手振りで話すナタルにすっかり引き込まれてしまっているセシル。
「だって、誰も戻ってきてないだけでもしかしたら向こうに住み着いちゃってる人もいるかもよ」
「そんなこと……無いとは言えないのか」
今まで自分が考えたことも無かった可能性に思案するセシルにナ

タルはさらに続ける。
「つまり、向こうからこっちに人が来れるって可能性もあるわけよ」
「そうかあ……」
セシルから十分な反応をもらえたことでナタルは話しを締めにかかった。
「そんな可能性がある中でその正体不明の飛行機が表れた。それって十分に大陸製って言えると思わない？」
「確かにそうかもしれない」
「しかも」
「まだあるの？」
話しはもう終わりかけなのにさらに続けるナタルの情報量は、セシルにとってそれはそれで驚きの一つだった。
「その飛行機には墜落したときに誰も乗ってなかったらしいの」
「じゃあどうやって」
まだ飛行機の主流がレシプロ機の群島世界において無人で操作する飛行機などというのは夢のまた夢である。そのせいでセシルやナタルには無人機という選択肢は最初から存在していない。
「だから、脱出したんでしょ。飛行士が」
「脱出……」
「つまりは群島世界のどこかに大陸の人間が潜んでるかもしれないってこと」
「……」
確かに無人の飛行機が墜落してそこに人が乗っていないということは脱出したと考えるのが一番自然だろう。
しかし、乗っていたのはおそらく大陸の人間。大陸の様子が群島世界の人間に分からないように、群島世界の様子も大陸の人間には分からないはずである。その大陸の人間が群島世界でいつまで潜んでいられるものか。
「セシル。何か顔がわくわくしてるよ」
「えっ？」

自分でも気付かないうちにセシルの顔は自然とほころんでいた。
いつか自分で大陸の様子を見たいと思うセシルにとってこの群島世界に大陸の人間が紛れているかもしれないという可能性はそれだけで心を躍らせる内容だった。
「そんなにだらしない顔になってる？」
「うん。それはあなたみたいな顔の人間がしていい表情じゃないと思う」
言われて顔を引き締めなおすが、やはり大陸のことを考えると自然とまなじりが下がってきてしまう。
「……駄目だね、これは」
結局セシルの顔は寮に帰るまでずっとゆるみっぱなしだった。

一章~3~

「さて、今日は転校生を紹介する」
教室全体響く低い声で担任のアントニオ・コリンズが通常の朝と違うことを言った。
「転校生？　ナタルは何か聞いてる？」
「さあ？　転校生が来るなんて言う大ニュースをわたしが取り逃してるとは……不覚だわ」
「ナタルが知らないなんて……」
この学校でおそらく一番も情報通であるはずのナタルなら何か知ってると思い聞いたのだが、ナタルから返ってきたのは彼女も知らないという事実。
「アントニオ先生はいったいどんな魔法を使ってわたしに隠し通したのかしら」
「魔法って……」
クラスの担任であるアントニオ・コリンズはオールバックに黒い軍服という姿が相まって非常に怖く、セシルも始めてみたときには少し不安になった。
しかし、ふたを開けてみれば怒らない限りは親しみやすい教師であり、生徒たちからは姓であるコリンズではなく名前の方のアントニオで呼ばれている。
「まさかあのナタルが知らないだと！」「アントニオ先生どうやって隠し通したんですか？」「転校生は男か女かそれだけが俺にとって問題だ！」「先生、美男子だったらぜひわたしの隣に！」「ちょっ！　あんた抜け駆けする気！？」
二人が疑問を話している間にもクラスメイトたちは熱狂している。学生にとって転校生という存在はそれだけで学生生活に変革をもたらすものとして認識されているのだろう。
「まあおまえら、落ち着けって」

『これが落ち着いていられますか！』
「……」
クラスの無駄な連帯感にアントニオは言葉をなくしていた。
「……気を取り直して、紹介しよう。入れ」
これ以上このクラスの流れに身を任せるといつまで経っても話が進まないと判断したのか、アントニオはさっさと転校生を教室に呼んだ。
「学校一の情報通の手を逃れた未確認生物のベールが今！」「未確認生物ってね……」「女来い！　女！」「いや男よ！　きっと男！」
「だとしてもあんたのところには行かないけどね！」
生徒たちの熱気を抑える前にアントニオが転校生を紹介しようとしたためか、その狂乱はさらに加速していく。
「うちのクラスって……」
「無駄に元気だね」
このクラスでは割と冷静な部類に入るセシルとナタルは、級友たちの興奮をどこか覚めた目で眺めていた。いつも自分が注目される側のセシルにとってこの程度のことでは熱くなれないのだった。
『おぉー』
「さあ、この馬鹿どもに名前を言ってやれ」
そうして入ってきたのは一人の男子生徒だった。
身長は百七十半ばといったところで、手足は長くスラリとしている。だからといってその身は貧弱そうではなく、がっしりとしているらしいことが服の上からでも分かる。
だが、一番の特徴はその髪の毛だった。
このクラスにやってきたということはまだ十五歳か十六歳であるはずなのに、その髪の毛は白。
クノー高等学校はその学費のせいか、群島世界のイグリス以外の国から来ている生徒も多くいるのでブロンドや赤毛など様々なカラーがあるが、さすがに真っ白というのはいなかった。
それも新雪のような清潔感のある白ではなく、どこか暗い雰囲気

を放つ不気味な白で、言うなれば生々しい骨のような色だった。
そして、その無造作に伸びた髪の下からはどこか人を惹きつける深い黒の眼が存在していた。
「春宮ルイス」
低い声で放たれたのはどうやら名前一言だけ。
『……えー！』
転校生に対してそれぞれがそれぞれにかなりの期待をしていただけに名前を言うだけの自己紹介というものに全員が不満の声を上げた。
「なあ春宮」
「……なんですか」
「確かに俺はこの馬鹿どもに名前を言ってやれと言ったがな、せめて何か自己紹介すべきじゃないか？」
「無理です。俺には語るべき自分なんて無いですから」
「……そうか。悪かった」
「いえ。悪いのは自分ですから」
担任として生徒の期待に応えようとルイスに自己紹介を促すアントニオだが、すげなく断られてしまう。
「とっ、とにかくだな。今日から春宮はこの二組に入ってきたわけだから上手くやるように」
『はい。先生』
二組の生徒たちは春宮の自己紹介が不満だったことはそれとして、それでもこの変わった風貌の転校生を受け入れることにしたようだ。
「このクラスってさ」
「ん？」
「いいんだか悪いんだか、よく分からないよね」
「……確かに」
思わず呟いたらしいナタルにセシルも同感だった。

一章~４~

午前の授業も終わり昼休みになると、基本的に好奇心旺盛、悪く言えばうざったい二組の生徒たちは勿論といえば勿論のこと、春宮ルイスの周りに集まっていた。
「春宮ってどこから来たんだ？」「発音的に漢字圏の人だろうから陽ノ元帝国？　でも名前は違うからハーフ？」「何かがっしりした感じがあるけど、どっかで訓練か何かしてたのか？」「何で髪白いの？」「趣味は？」「好きな物は？」「年齢は？」
ちょうどルイスの席はセシルの左隣だったので、自分の席の隣に集まるクラスメイトたちを見て呆れている。特に最後の質問は自分と同じなんだから分かるはずだろうと。
そんなクラスメイトたちにルイスが発したのは
「……悪いがお前らと馴れ合う気は無い。俺は自分の目的のためにここにいる」
『……』
（今のはちょっとまずいんじゃないかな……）
場の空気が凍ってしまったのでセシルは自分が介入しようかと考えたが
『……ぷっ、ははははは！　お前何言ってんだよ！』
「はっ？」
クラスメイトたちの反応は予想外のものだった。
それはルイスにしても同じらしく、今朝教室に入ってきたときから貫いていたポーカーフェイスには意味が分からないといった感じの表情が浮かんでいる。
「何だよ目的って！」「最高のジョークだったわ」「体を鍛えた上にジョークもできるとは……すげえ奴だ」「その見た目から繰り出される冗談はもはや武器ね」「趣味は冗談ってことでいいのか？」「久しぶりに笑わせてもらったぜ！」「最高だね！」

「……」
セシルの目から見れば今のルイスの発言は冗談などではなかったはずだが、なぜかこのクラスの生徒たちはそれを冗談と受け取り、さらにルイスに絡んでいく。
「……どうすりゃいいんだ」
思わず呟かれたらしいルイスの声はセシルの耳に届いたが、何と声をかければいいのか分からなかった。
『とにかくこれからよろしく！』
「あっ、……ああ」
ルイスは何か反論しかけたようだが、このクラスの人間に下手な言葉を出すと余計に面倒なことになると感じたのか、しょうがないといった調子で返事を返す。
それに満足した生徒たちは各々自分の食事をしに散って行った。
「お昼も食べずに転校生を質問攻めにするって……」
「気にしたらおしまいよ」
呆れるセシルにナタルは言いながら弁当を取り出す。
クノー高等学校の寮には食材を持ち込めば各自自由に利用できる調理場があるので弁当を自分で作ってくるものも少なくない。セシルもその一人である。
「とりあえずご飯食べようか」
「そうね」
すると、ルイスの周りに残っていた四人の男女がセシルたちの周りに集まってくる。
「俺らも一緒でもいいか？」
「いいよー。ほら春宮も」
「……もう好きにしてくれ」
先ほどのことで思い知ったのかルイスはされるがままだった。
「ほらみんなの机くっつけて」
ナタルが指示を出して七人分の机がつながる。
「さて、じゃあ自己紹介でもしながらでいいかな？　春宮？」

「勝手にしろ」
ナタルの声にも邪険に返しているが、そんなことは気にされずに自己紹介が始まった。
「じゃあ、まずわたしからね。ナタル・クリング。このイグリス出身ね。あと、みんなもご存知の通りこのクラス、いえこの学校で一番の情報屋の自負があるわ」
「……」
自己紹介といっても全てはルイスのためだけにやっているのだが、そのルイスは興味ないといった顔をしている。
「人の話はちゃんと聞いてほしいものね……じゃあ次ー」
だが、言ってもどうせ聞かないだろうと諦めたらしいナタルは次へと交代する。
「はいはーい。俺はカート・ブロンソン。カートと呼んでくれ！アメリア皇国からはるばる来た。で、こっちが」
「アルバ・フィリップス。同じくアメリア皇国の出だ。隣の馬鹿が騒がしくて悪いな」
カートの横に座っていた男子が眼鏡を押し上げながら視線をカートへとやった。
「ちょっ、アルバ！　馬鹿って誰のことだよ！」
「？　お前の他に誰かいるのか？」
「んだと！」
「はいはいストップ！」
二人が喧嘩を始めようとしたところで小柄な少女が割って入るが、その背のせいかアルバとカートの間に埋もれそうである。
「二人は幼馴染だからいつもこんな調子なの。わたしは花村ルカ。おそらく春宮くんにも血が入ってると思うんだけど、陽ノ元帝国生まれね」
「止めるな花村！」
「この馬鹿とは一度決着をつけねばならないらしいからな」
だが、結局ルカの制止では二人は止まらず、更に喧嘩を続けてい

た。
「あー春宮、この馬鹿二人はほっといていいから紹介続けるわよ？」
「……好きにしろ」
どうやってもやめる気のないらしいカートとアルバを見捨てて、ナタルは場を進行する。
「じゃああと残ってるのは……ミザリーとセシルね」
「じゃあわたしからでもいいですか？」
そう言って手を上げたのはブロンドの巻き毛をした少女だった。
「わたしはミザリー・クインと言います。帝政フロアスの出身です。よろしくお願いしますね、春宮くん」
おっとりとした口調のミザリーはにっこり微笑む。その体からはどことなく高貴な雰囲気を漂わせており、彼女が名家の出であろうことがうかがえた。
「最後はセシルだけですね」
ようやく自分の番が回ってきたセシルはルイスの方を見る。
「……」
その顔には最初と変わらない憮然とした表情が浮かんでいた。
「わたしはセシル・マクファーデン。ここイグリスで育ったけど、故郷は別のとこ……って、ちょっと。こっち向いてほしいんだけど」
もはやこっちを見ようとさえしないルイスの顔を無理やり自分の方へと向けさせる。
「ッ！　お前は……」
「えっ？」
お互いの目が合うと、ルイスは急に何かを思い出したかのように立ち上がる。
「何でこんなところにいるんだッ！」
声を張り上げるルイスにカートとアルバも喧嘩をやめて一度落ち着かせようとルイスの肩に手を置く。
「何だ？　セシルと春宮は知り合いだったのか？」
「ふむ。セシルの方にはそのような様子は無かったが……」

「わ、わかんない」
問われるも、セシルにはルイスと会った記憶は無かった。
「お前……覚えて……いや、悪かった。何でもない」
セシルの否定に何か諦めたのか、ルイスは急に立ち上がったせいで転がっていた椅子に座りなおす。
「えっ、結局春宮くんの思い違いってことでいいわけ？」
「……ああ」
まだ納得のいっていないであろう表情であったが、これ以上言っても仕方ないと判断したのかルイスは肯定の言葉を返した。
（ルイスくんとどこかで会った……？）
その間もセシルは自分の記憶と向き合っていた。
ルイスの反応からするにどこかで会ったのは間違いなさそうだが、セシルにはそれがいつのことなのか分からない。それどころか何も思い出せない。
ルイスのような特徴的な人物に出会っていれば覚えているはずなのにそれが全く記憶に無い。
（もしかして……！）
そこでセシルはある結論に至る。
「ルイスくんってさ……どこから来たの？」
それはルイスの出身地。
「ん？　セシルには春宮の出身地が何か重要なの？」
「うん」
首を傾げるナタルに首肯を返す。
（私が思ってる通りなら……ルイスくんの出身地とわたしの出身地は同じなのかもしれない！）
セシルには自分が生まれた場所の記憶が無い。気が付けばこのイグリスのリヴァルで祖母と二人暮らしていた。
祖母が生きている間に自分がどこで生まれたのか聞いても最後まで教えてはくれなかった。
『お前は知らない方がいい』

祖母は最後までセシルに真実を教えることなく亡くなってしまった。
もしも、自分とルイスとの間に接点があるのだとしたら自分の記憶の無い生まれ故郷、今よりもさらに子供だった頃に住んでいた場所しかない。
「……それは言えない」
「なっ、何で？」
ルイスの答え次第では自分とルイスとの関係どころか自分の子供の頃の記憶についても何か分かるかもしれないとセシルは興奮していた。
「……それも言えない」
「そんな……」
だが、セシルに返ってきたのは拒絶。ルイスは自分の出身地についてすら教える気はないようだった。
「なあルイス。セシルの質問に答えてやったっていいじゃねえか。減るもんでもあるまいし」
「ああ。僕もそう思う」
カートとアルバが取り付く島も無い様子のルイスを諭そうとする。
すると、返ってきたのは
「いいか！　お前ら俺の過去を詮索するな！　俺からお前らに教えられることはないし、お前らにやれるもんもないんだ！　放っておいてくれ！」
「……」
明確な拒絶。周りを全て自分から遠ざける言葉。
そのルイスの表情には明らかな怒りが浮かんでいた。それはどこか沈んでいたその瞳に炎を灯したかのようで、ルイスの感情は急激に爆発した。
「わっ、悪かった……」
「すまなかった……」
そのあまりの剣幕に押され、カートとアルバも謝るしかなかった。

しかし、カートやアルバたちが気まずくなる中セシルはルイスの表情を見ていた。
（ルイスくんは無理やり周りを遠ざけようとしてる）
確かに、ルイスの瞳には怒りの表情が浮かんでいたが、同時に周りを気遣っているように感じられた。
（まるで自分と関わると危険な目に会うかのように）
昔からセシルは人の感情を察するのが得意だった。
表では笑っている人間の裏にある怒りを読み取ったり怒りの下にある悲しみなど、セシルの前では感情を隠すというのは意味を成さなかった。
それがなぜなのかは自分でも分からないが、渦巻いている人の感情というものを感覚的に読み取ることができた。
だから今ルイスが隠している感情もセシルには分かる。
（でも、何かいつもより分かりづらい）
普段ならはっきりと感じられる人の感情が、ルイスの場合判然としない。
感じられるには感じられるのだが、あたかも靄がかかったようではっきりとは読み取れなかった。
「とにかく！　もう俺は放っといてくれ。別にお前らに何かしたりはしない。静かにしてくれ」
「……」
自分と関わるなと明言するルイスの様子に場はさらに重くなる一方だった。
「と、とりあえずさ、みんなご飯食べちゃおうよ」
何とか場を和まそうとするルカだったが、一向に空気は晴れない。
「……」
みんな自分の食事に手をつけ始めるが誰も口を開こうとはしなかった。

一章~５~

（よし。気付かれてないね）

昨日もナタルと歩いていた人ごみの石畳を歩きながらナタルは前方の様子を確認する。

（何とかしてルイスくんにわたしとの関係を教えてもらわないと）

今現在セシルが何をしているのかと言えば、ルイスの後をつけていた。

昼休みは微妙な空気のままになってしまっていたが、セシルだけはそこで目的を持った。

放課後、寮暮らしのはずのルイスが街の方へ繰り出すのを見てそこで何か秘密を得られるかもしれないと。

（わたしこんなことしてていいのかな？）

なぜかルイスに対しては妙な執着を見せる自分に少し疑問を覚えるが、もうすでに行動を開始してしまっている以上行きつくところまで行ってやろうと決めた。

（ルイスくんは一体どこへ行こうとしてるんだろう？）

後をつけていて気付いたことだが、ルイスの行動には目的地というものは感じられなかった。ただ街を散策しているだけという感じである。

サンドウィッチなどの軽食を売っている露店を見ていたかと思えば、安物のアクセサリーを扱う商店を覗いたりしている。

（でも、だんだん商店街から外れていってるんだよね）

色々な店を眺めていたルイスだがだんだんと商店の無い方へと歩を進めている。

おかげで人の姿もまばらになり、ルイスの姿を見つけるのは楽になったが、その分自分の姿が向こうからも見えやすくなってしまった。

（まあ、人ごみの中でもあの髪の色は見失わないけど）

事実、ここに来るまでに何度かルイスを見失いそうになったが、その度にその特徴的な白髪に助けられていた。
（うーん、ここまでつけてきたのはいいけど見つかったときに何て言えばいいんだろ）
先ほどから考えているのはそのことばかりだった。
セシルは自分が割と感情的に行動しがちな人間であることを理解している。思い立ったらすぐ行動してしまう。それは見切り発車という形になり、最終的にどうするかなどを考えていないことが多い。今もまさにその状態に陥っていた。
（そのときはそのときで何とかなるか）
学校のアイドル的な存在であるセシルのその楽観的な思考を知るのはナタルたち仲のいい友人だけだった。
その間にもルイスはどんどんと進んで行っており、気がつけば周りにいた人の数もかなり減っていた。
「そろそろ、話しかけようかな」
人のいない場所でなら自分の問いかけに答えてくれるかもしれないという希望的観測にすがりルイスに話しかけようかと考える。
そのような思考をしている時点でセシルは尾行に向いた人間だとはとても言えないのだが、彼女が学んでいるのはあくまで軍事訓練であり尾行をする技術ではないのだから構わないのだろう。
（さて、どのあたりで声をかけよう）
声をかけること自体を決めてしまえばあとはタイミングの問題である。
下手なところで話しかければ質問に答えてくれないだろうし、最悪怒りだす可能性もある。
いくら楽観的行動が自分の常とはいえ、そこは考えなければならない。
「ん？　路地を曲がった？」
思案していた顔を上げると、ルイスが細い路地へと入っていく。
今まで歩いていたのは大通りだった。それが急に細い路地へと入

る。
「これはチャンスかな」
その目的はよく分からないが、人のいない路地なら話しかけるにはちょうどいいだろう。
ルイスの背が路地に消えたのを確認してから今までである程度離していた距離を詰めていく。
「ルイスく……あれ？」
路地を曲がって声をかけようとしたところでルイスがいないことに気づく。
「確かにここを曲がったんだけどな……」
大通りの路地というものはどこもゴミなどが押しやられ汚れが目立つ。その足元にゴミの散らばる中を慎重に歩いていく。
「うー、臭いなあ」
セシルもこの街に暮らす人間ではあるので汚いうえに悪臭を放つ路地には普段ならば近づかない。
だが、ルイスがこの路地を曲がったところを見た以上、探すのを途中でやめるのは悔しい気がした。
「ここからいきなり走ったなんてことはないよね……」
路地の不気味な雰囲気のせいか、自然と独り言は多くなる。
「ここまでに来て逃げられたとかだったら悲しすぎるよお」
その目じりは不安により下がっており、セシルに心をときめかすクノー高等学校の男子たちが見ればたちどころに助けの手を差し伸べてくるだろう。
「ルイスくーん」
自分がさっきまで人をつけていたことは忘れて、自分の近くにいるはずであろうルイスを呼ぶ。その声は路地に反響するが、呼ばれた人物は出てこない。
「ほんとどこいったんだろ……」
口から出てくる独り言は細くなって消えていく。
屈強な男や暴漢などの物理的な恐怖には軍事訓練で慣れてはいる

が、一人の女子としてこう言った不気味な雰囲気には慣れなかった。
不安に思いながらも少しずつ路地を進んでいく。その足取りは非常に重い。
「ルイスくーん……？」
もう一度ルイスの名前を呼びながら前を見ると、そこは行き止まりだった。
「え？　ルイスくんはここに入ってまだ会ってないのに……」
ルイスがこの路地に入ったというのは自分の見間違いだったのだろうか？　そんな更なる不安が胸に沸き起こる。
「見間違いだったのか……早く帰ろ」
小さく呟きながらここにルイスが入るのを見たのは自分の間違いだったと結論付ける。
そうなってしまえば、今更ルイスを見つけ出すのは難しいだろう。今日のところは寮へ帰るしかない。
「それに、寮に戻ればそのうち帰ってくるよね」
クノー高等学校の寮は男子も女子も同じ建物で一階が談話室や食堂の集まった共通施設、二階と三階が男子寮、四階と五階が女子寮になっている。一階の談話室を通らなければ自分の部屋に帰れない以上、そこで待っていればルイスにも会えるだろう。
「よし。そうときまればこんなとこいつまでもいる必要ないね」
決めて振り向く。
「……よう」
「……ルイス……くん？」
そこにはルイスがいた。
ただし、
「そのてっ、手に持ってるのは……何？」
その手には大型の銃器が握られていた。
それは俗に言うハンドガンと呼ばれる種類のものだったが、そんな物の存在しない群島世界に住むセシルにはそれが分からない。あるのはリボルバータイプの拳銃で、ブローバック機能の付いた銃な

ど想像もつかなかった。
ただ、それが人を殺せる銃器であろうことは形状から何となく察せられた。
「どうして、それたぶん拳銃か何かだと思うんだけど、どっ、どうしてそれをわたしに向けてるのかな？」
「……」
銃を向けられている恐怖に耐えながら何とか言葉を紡ぐが、ルイスから反応はなくその眼は前髪に隠れて窺うことはできない。
「何か反応してくれないと怖いかなあ……なんて」
「なぜ俺を尾けた」
吐き出されたのは低く抑制された声。聞くものに威圧感を与えることを目的とした圧力のかかったもの。
「なっ、何でって……それは……」
ルイスの出すその圧倒的なオーラにセシルは気圧され、まともな返答を返すことができない。
「なぜ俺を尾けた」
だが、ルイスはそれにも焦ることなくさらに抑制した声を出す。その声からは何の感情も感じられず、それがかえってセシルに恐怖感を与えていた。
「るっ、ルイスくんに聞きたいことがあったから……」
ようやく返答を返すが、その声はだんだん小さくしぼんでいった。
「聞きたいこと、だと？」
前髪の下に見え隠れする眼にはこの段になってもやはり感情が灯っていない。
言うなれば死体と目を合わせているような。意識の無い人間の目を見ているような。生気の感じられない瞳。死気すら漂わせる瞳。その瞳はどんなに覗き込んでも底が見えずただただ引きずり込まれるような底無しのものだった。
それは初めて会った時のルイスの瞳とは全くの別物で、言うなれば初めて会った時のものは「惹き込まれる様な」そして今は「引き

ずり込まれる様な」
その違いは些細なようでいて決定的で、そのどうしようもない差異がセシルには恐ろしく感じられた。
「ルイスくんは、わたしのこと知ってる、みっ、みたいだったから……」
「何が言いたい」
ここにきてようやく腹をくくったセシルは一気にまくしたてる。そうしなければ目の前に突き付けられた凶器に負けそうだった。
「ルイスくんはどこの出身なの！？　わたしとどこで会ったの！？　それが分かればわたしがどこで生まれたのか分かるかもしれないの！」
溢れ出したものは途中では止まらなくなり、普段の自分が抑えている感情の奔流が暴力的なまでの力を持ってセシルから流れ出てきた。
「……俺は」
それに対するルイスは相変わらず感情の感じられない調子で
「大陸の人間だ」
「えっ？」
セシルにとって
「俺は……大陸で生まれ大陸で育ち」
全てが変わる言葉を
「大陸からここに来た」
平然と放つのだった。

二章~ 1~ （前書き）

ここから二章になります。

二章~１~

ルイスは自分の放った言葉をどこか遠くに感じていた。
（ああ……言っちまったか）
今自分の体を操るのは自分であって自分ではない。
二重人格というわけではない。しかし、単純な自分というわけでもない。
（どうすっかなあ……）
自分がいる場所は汚い路地裏でその手には大陸性の銃器『デザートイーグル５０ＡＥ』が握られている。
十四インチの長い銃身を持つこの銃は通常なら片手で支えるのは大変なはずだが、訓練を積んできたルイスには関係ない。
（こいつ、あんまりの驚きに目を見開いて動かないし）
目の前には薄い茶色の長い髪をした見目麗しい少女が呆けた表情をして立っている。
（あっ、やばい戻るッ！）
その可憐な姿を目に納めていると自分の意識が表面に浮かぶのが分かる。
「おっ、おい……マクファーデン」
自分の意識が体の隅々に行きわたっているのを確認しながら眼前に立つ少女に声をかけた。
「……ルイス、くん……今何て言ったの？」
「そっ、それは……」
先ほど自分が目の前のセシルに言ったこと。
『俺は大陸の人間だ』
この群島世界に住む人間にとって希望と恐怖の入り混じった感情で空想する世界。
大陸。この一つの島に一つの国家が作られ、その島同士の密集したこの狭い世界で暮らす人間にすれば想像もつかない世界。

「……大陸の人間だと言ったんだ」
それを自分は暴露してしまった。
そのとき受けたセシルの衝撃はルイスには測りようもない。
「じょっ……冗談じゃない、よね？」
「……ああ」
肯定の言葉を返しながら銃を下ろす。
「じゃっ、じゃあ、わたしは大陸の人間、ってこと？」
セシルはルイスの言葉を疑うことなく問いを紡いでいる。
「それは……分からない」
「えっ！」
それまで先ほどのルイスの発言のせいか俯いていたセシルは、驚いたようで顔を上げた。
「お前は俺が昔にお前と会ったことがあると感じているようだが、それはおそらく俺の勘違いだ。だから、お前は大陸の人間ではないはずだ」
「……ほんと？」
「本当だ」
嘘だ。ルイスは自分が口から出まかせを言っているのは分かっている。
自分は子供のころにセシルと会ったことがある。どうやらセシルは覚えていないようだが、ルイスとセシルは子供のころに会っていた。
（もう六年か）
記憶力のいい自分はしっかりとそのときのことを覚えている。
施設以外何もない広い庭で。
訓練漬けだったはずの自分はセシルと駆けまわったのだ。
一目見た瞬間に分かった。あのときの少女はセシルなのだと。
当時から可愛らしかったセシルだが、今はそれが美しさへと変わっている。
だが、ルイスはどうやら変わっていないらしい彼女の根本を感じ

取った。
「そう……なの。とっ、ところで、その銃は……何かな？」
「これは……」
自分の手元には無骨なハンドガン。いくら軍事訓練を行うクノー高等学校の生徒とはいえ、普段銃器を持ち歩いていることはない。ましてや、その銃器は大陸製。この群島世界には存在しないものである。
「俺の武器だよ。俺は群島世界にとある人間を追ってやってきた」
「とある人間？」
ルイスは自分の目的を告げることに決めた。
「俺の……親だ」
「親……？」
意味が分からないといった表情のセシルにルイスはさらに言葉を紡ぐ。
「正確には親の一人と言うべきか」
自分を育てた『親』。
通常であれば父母一人ずつの二人であるはずの彼には五人の親がいた。
「どういう、こと？」
ことここに至ってまだ自分が銃を構えていることに気づいたルイスは、制服の内側にあるホルスターに銃をしまいながらセシルに答えを返す。
「俺は、兵士になるために施設で育てられた」
「施設……」
それがセシルには想像できないものだったのか、困惑の表情を浮かべている。
「俺の親父は元々大陸近くにあるとある島国の軍人だった」
だが、そのセシルの困惑にも構わず自分の生い立ちを語っていく。
「だが、ある日お袋が死んだ。元から病弱で体の弱い人だったからな。それから親父は変わった。軍での階級が高かった親父は大陸に

ある大国家に戦争を仕掛けた。自分の独断でな。」
自分の話が長くなることを覚悟したルイスは地面を手で払いそこに腰を落ち着ける。
すると、横にセシルも同じようにして座った。
「それを受けた島国の政府は親父を戦犯として軍を追放。親父は軍に追われたがそれをかわして姿を眩ませた。そして、大陸の人の住まない奥地で兵士を作り始めた」
「兵士を……作る？」
そう。それは育てるではなく作る。ルイスの父親のしていた所業はまさにそう表現するのが正しいものだった。
「最強の兵士。親父はそれを常に目指していた。人体をどこまでも強化し、精神をどこまでも強化し、全ての『兵士』は体の全てをいじくりまわされた。その実験の中の一つにあったのが感情を操作するというものだった」
ルイスは語りながら、自分が今まで受けてきた数々の実験を思い返す。
「感情を操作って……どういうこと？」
話の内容が突拍子もないことであっても、ルイスの静かに語る姿に段々と落ち着きを取り戻してきたのかセシルは言葉を詰まらせないで問いを返してきた。
「とある兵士は喜び以外の感情を消された」
その兵士は喜びに頼って上官に褒められるために人を殺すようになった。
「とある兵士は怒り以外の感情を消された」
その兵士は怒りに頼って仲間を殺された怒りで人を殺すようになった。
「とある兵士は哀しみ以外の感情を消された」
その兵士は哀しみに頼って人を殺す哀しみを紛らわすために人を殺すようになった。
「とある兵士は楽しみ以外の感情を消された」

その兵士は楽しみに頼って快楽を求めるために人を殺すようになった。
「全ての感情が人を殺すことに直結させられた」
「……そんな！　人の感情はそんなもののためにあるんじゃないのに……」
セシルの表す憤りは正しいものだった。ただし
「それも感情なんだ」
人は感情を無くすことができない。どんなに心を押し殺してもどこかで必ず綻びが出る。それは人であればしょうがないこと。
「だが、親父たちはそれをしょうがないと割り切れなかった。人が人であることを許せなかった」
そして、辿り着いた結論。
「一つの感情に頼って生きる兵士が不完全であると考えた親父たちは、感情を奪い去った兵士を作ることを考えた」
それは人が人でなくなる瞬間。
「喜びに油断することなく、怒りに冷静さを欠くこともなく、悲しみに暮れることもなく、楽しみに怠けることもない。そんな『モノ』」
「それって……」
「人じゃない。そんなものは人じゃない」
感情の無いただのモノ。人の形をしたモノ。人形。
「そして、俺は『モノ』になった」
「えっ！　それってどういう……」
「俺は……感情を失くした」
「でも、ルイスくんは怒ったりしてたじゃない！」
「感情の残滓だ。あと五年。二十歳になるころには完璧な人形だ」
ルイスの感情はあと五年。五年経ってしまえば感情を失いただの人形になる。
「何で！？　その人たちはルイスくんの親だったんじゃないの！？
どうして感情を奪うなんてことッ！」

「俺があいつらの子供だから」
「……ッ！」
「生まれた時から兵士なることは決まってたんだ。親父が世界に喧嘩を売るための兵士。今でも親父が何で兵士を作り始めたのかは分からない。ただ言えることは親父たちの作った兵士は傭兵として戦場に送りだされ、圧倒的な戦果を上げた。本当に人のやったことかと思えるほどの戦果を」
「どうして……それでルイスくんはどうしてここにいるの？」
押し殺せない感情が溢れたようでセシルの目からは涙が流れていた。
会って間もないはずの自分。そんな赤の他人のために涙を流すセシル。その姿をどうにかしてあげたくてルイスはそのほほに流れる涙を手でぬぐった。
「お前が泣くことじゃない。とにかく俺は親父たちの元から逃げ出した。そして、手に入れた。親父たちが今ここにいるという情報を」
自分の兵士としての状態がある程度のレベルになったころから父親たちはルイスの前に姿を現さなくなった。
元から世界中を飛び回っていたらしく、ルイスの完成に目処が立ったあたりで施設から出たらしい。
「だから、俺はこの群島世界に来た。感情を失うまでの限られた時間の中で親父たちを殺すために」
「そんな……殺すなんて」
「いや、これは俺が復讐しようとかそれだけの問題じゃない。親父たちを殺さないと大陸に広がる戦火は収まらない。それどころかこの群島世界にまで戦火は及ぶ」
「群島世界にまで……」
何とか涙をこらえようとするセシルは驚きを隠せない。
「いいか。大陸と群島世界の間には百年以上の文明の格差がある」
「ひゃっ、百年？」
「そうだ。元々資源の少ない群島世界じゃ科学の発展に限界があっ

た。だから人は大陸を目指した」
「でも、帰ってきた人は誰もいないし……」
未だに大陸を目指し出立した者が群島世界に帰還したことはない。全ての人間が行方不明になっていた。
「そいつらは皆大陸に辿り着いていたんだ」
「えっ……じゃあ何で」
「みな大陸に移住したのさ」
今まで大陸探索に出た部隊には学者などが乗り合わせていた。
彼らは大陸の科学に熱中し帰ることを忘れた。
「大陸の生活は群島世界に比べれば快適だ。だから誰もがそのまま大陸に住み着いた。元は大陸に人はいなかったんだ」
「じゃあ、今大陸にいる人たちは……」
「そうだ。群島世界の住人の子孫たちだ」
初めて群島世界に辿り着いたのはクリストファー・コルスという1人の航海士だった。
そこに一緒に乗り合わせたのが稀代の天才と呼ばれたアルベルト・アインスという学者。彼は大陸を自分の手で開拓することを選んだ。群島世界に返ることも忘れて。
「そして、アインスは群島世界から大陸に辿り着いた人間を全て受け入れた。そして、大陸の豊富な資源と彼の独創的な研究から大陸の文明は飛躍的に上昇した」
「でも、群島世界に帰らなきゃって人もいたんじゃ」
「そいつらは皆殺された」
それが保たれ続けている大陸の秘密。
今も加速度的に進み続けるその科学力はもはや群島世界のものとは比べ物にならなかった。
「だから、もしもこの群島世界で大陸の兵器を使った戦争が起きれば」
「群島世界は……消える」
「そうだ」

ルイスには大陸にある数々の兵器が群島世界を蹂躙していくさまをありありと思い浮かべることができる。
「俺は親父を殺す。これだけは譲れない」
「……」
顔を俯けたセシルの表情は横からうかがうことはできない。
しかし、その儚げな姿にルイスは何か声をかけようとした。
「なあ、マクファー……」
「なーにやってんのかな？　お兄さん」
「ッ！」
その言葉は突如表れた男の声に消された。
ルイスが気付いたときには男は路地の入り口に立っており、それは同時に出口を塞がれたということでもある。
「まさかまさか、僕の気配に気付かなかったってことは、ありませんよね？」
ニタニタとした笑いを顔に浮かべるのはまだ少年といっていい年齢の男。
その髪の毛は金色に染まっているが、それは地毛とも着色されたものとも違う不思議な色合いだった。
着ているのは真っ黒いスーツで、ネクタイまで黒なのが喪服を髣髴とさせた。
「お久しぶりですね、ルイスさん」
「マキ……」
「そうです。ご存知間宮マキです」
マキは大仰な身振りでルイスとセシルに向けてお辞儀をした。
「ルイスくん、このこと知り合いなの？」
1人状況に置いていかれているセシルは何とか現状を理解しようと口を挟む。
「これはこれは、僕としたことが女性をほったらかしにしてしまいました」
そして、今度はセシルに向けて大げさなお辞儀をすると

「お初にお目にかかります。僕の名前は間宮マキ。間宮四兄弟の三男です。そして、そこのルイスさんの後釜です」
「ルイスの……後釜？」
「やめろマキ！　こいつを巻き込むな！」
だが、ルイスの怒鳴り声にもマキは怯むことはなかった。
「巻き込むな？　いまさら何を言ってるんですか。ルイスさんはすでにそこの女性に色々話してしまいましたし」
それに、と
「あなたに関わった人間は殺せと、我が主が」
「レオナルドかッ！」
叫ぶルイスの顔には抑え切れないほどの憎悪が浮かんでいた。
「ここにいるんだな？　アイツがッ！」
「それはお答えできませんがね。それよりも」
言ってマキは懐に手を入れた。
「任務を遂行させてもらいますよッ！」
次の瞬間にはマキの手にはサブマシンガンが握られていた。
「伏せろッ！　セシル！」
「……ッ！」
言うが早いかルイスはセシルを地面に伏せさせながら自分もデザートイーグルを構えていた。
「ハハハッ！　デザートイーグルですかッ！　威力重視とはルイスさんも分かりやすいですね！　でも、連射性能じゃスコーピオンには勝てませんよッ！」
マキが操る銃はＶｚ．６１スコーピオン。その小ささからマシンピストルとも呼ばれる短機関銃だった。確かにマキの言うとおり機関銃とハンドガンでは圧倒的に連射力が違う。
ましてや大型のデザートイーグルと小型のスコーピオンではその差はさらに広がる。
「しかもルイスさんはそこの女性を守りながらですからね！　そんな状態で僕に勝てますか？」

「うるせえ！」
牽制の意味も込めてルイスは銃弾を放つ。それに返ってくるのは圧倒的な弾幕。
近くにあった大きな鉄製のゴミ箱の裏に飛び込んで何とかやり過ごすが、群島世界で作られた鉄製品がいつまで銃弾の嵐に耐えられるかは疑問だった。
「ルイスくん……大丈夫なの？」
「お前こそ大丈夫か？　銃弾当たってないか？」
「だっ、大丈夫だけど……」
「そうか」
ルイスはセシルを巻き込んでしまったことを後悔している。
だが、今の状況では悩んでいる間に撃たれるのがオチだった。
「ほらほら、そのゴミ箱もどんどん削れていってますよ！」
いくら連射性能が高いからと言って永遠に撃ち続けられる銃は無い。それは科学の発展した大陸でも同じ。だからこそマキのリロードの瞬間を狙って撃つのだが、デザートイーグルの装弾数は七発。一発一発の威力が大きいとはいえ当たらなければ意味はなく、その少ない装弾数は確実に劣勢の原因となっていた。
「全然当たってませんよッ！」
リロードをしながらも軽い身のこなしでルイスからの銃弾をマキは確実に避けていく。
その動きは銃というものに対する恐怖と言うものが感じられず、かなりの訓練を積まされていることが窺えた。
「ここから出られれば……」
ルイスだけならば分間七百五十発もの銃弾の嵐の中を進むことができるが、今彼のもとにはセシルがいた。
いくら学校で軍事訓練を積んでいても、これだけの数の銃弾をかわすことはできない。
ましてやマキの狙いは正確で、彼の手に握られているのが連射性の低いライフルだったとしてもその一発一発で確実に仕留めてくる

だろう。
「おいセシル」
「はっ、はい！」
先ほどからセシルを呼びやすいファーストネームで呼んでいることにルイス自身は気づいていない。
「ちょっとここで待ってろ」
「えっ？　ここで待ってろって……」
セシルに待機を命じたルイスはその反応を待たずにゴミ箱の後ろから飛び出した。
「やっと出てきましたか！　それじゃ遠慮なく行きますよッ！」
マキはルイスの姿を見ると左腕をスーツの中へいれる。
出てきた手にはもう一丁スコーピオンが握られていた。
「ここからは全力で行きます」
「お前ごときに負けるかッ！」
セシルが後ろにいる以上退けない。
ルイスは腹を決めて銃を構えた。
「まずはてめえとてめえの主からだッ！」
対するマキは薄く笑い
「所詮はプロトタイプの分際でふざけたこと抜かさないでください！」
そこからの銃撃戦はまさに人を超えた戦い。
人形と人形の舞踏劇。
その幕は落とされた。

二章~２~

「この弾幕の中を進んで来られますかッ！」
マキのとる戦法は至極単純なもの。
二丁のスコーピオンを交互に使い、その圧倒的な連射力でルイスを遠ざけるというもの。
スコーピオンを同時に使わないことにより、本来起こるリロードの穴を埋めていた。
「こんなお遊びじゃ俺は止まらねえよッ！」
だが、ルイスはその弾幕をものともせずに進んでいく。
あえて、直線状ではなく弾幕になるように撒かれるマキの銃弾の穴を縫うようにして駆けていた。
「さすがですね。これごときで止まるとは思っていませんでしたが」
マキもルイスの圧倒的な速さを前にしてさえその余裕を崩すことなく、スコーピオンの連射を続けていた。
これはルイスとマキ双方に言えることだが、いくらリロードを速くしたところで、一度の戦闘で持てる弾薬の数は限られている。このまま消耗が続けば弾が切れるのは時間の問題だった。
「クソッ！」
隙を見てはルイスも銃弾を放ってはいるが、一向に当たる気配はない。
だが、対する自分にはかすり傷とはいえ確実に傷が増えていた。致命傷となるような一発をもらってはいないが、その圧倒的な弾の数に消耗は続いている。
「ほらほら！　だんだん当たる弾の数が増えてますよッ！」
マキは自分が優位に立っているという楽しげな雰囲気とは裏腹に、その戦法を崩すことは無く、延々と銃弾をばら撒き続けた。
戦闘において１つの戦い方を使い続けるというのは精神力がいる。
１つの事を続けるというのは人間の心に不安をもたらす。

そして、その均衡が崩れ戦い方を変えたときに人は死に至る。
だが、マキはそのような過ちは犯さない。
「僕らは所詮人形。誰かの掌で踊り続けるしかないんですよッ！」
銃弾と一緒に吐き出されるマキの言葉には多くの思いがあった。
「てめえと一緒にすんじゃねえッ！」
その言葉がルイスには許容できない。
まだ感情の残っている彼には哀れな人形と呼ばれることが許容できない。
ゆえに加熱する。感情は暴走する。
それが過ちだと分からずに。
「とっとと死ねッ！」
均衡に耐えられず一気に突っ込んだのはルイスだった。
明らかに先ほどまで避けていたはずの銃弾をその身に受けながらマキの懐へと飛び込んだ。
「それはあなたでしょう」
「なっ！」
対するマキは冷静だった。
休ませていたもう一丁のスコーピオンの引き金を飛び込んできたルイスに向けて引くだけ。
「僕は喜びという感情だけにすがって生きている。それは殺人に、戦闘に喜びを見出すように作られましたから。でも、どこまでも冷静ですよ？　怒りで我を失うなんてことはありませんから」
「……ふ……ざ、けんな」
どこか遠くへ意識が飛んでいく中ルイスはそれだけを捻り出す。
（まずいな。奴が出てくる）
頭の中ではもう１つの自分が上ってくることを感じながら。
「……」

二章~ 3~

「どうしました？　まさか死んだとか言うわけでもないでしょう？」
俯いて言葉を発さなくなったルイスの様子にマキは訝しげな声を上げる。
「まあ、死んだというならそれでもいいんですけどね」
そして、鉄製のゴミ箱のほうへ振り向くと
「あとはあそこにいる方を殺すだけですから」
残虐な笑みを浮かべた。
すると、その背後から
「……て」
「ん？」
「待て」
「なあんだ、生きてたんじゃないですか」
声をかけたのはルイスだった。
しかし、未だに顔を俯けておりその表情はマキには窺えない。
「さて、じゃあ早速続きでも……」
行きますか、と。
マキはそう続けるつもりだったらしい。
だが、その言葉は一発の乾いた音によってかき消される。
「……へえ」
ルイスの放った弾丸は正確にマキの右手に握られたスコーピオンを撃ち抜いていた。
「さっきまで怒りでわれを忘れていたはずのあなたがまだこんな精密な射撃ができるとは驚きました」
マキにとっては幸い、ルイスにとっては不運なことに銃弾で貫かれたスコーピオンは暴発することも無く、マキの遥か後方へ弾き飛ばされただけだった。
「何か言ったらどうですか？　ルイスさん」

声をかけても反応が無いルイスへそれでもマキは一方的に話しかける。
「……に……だ」
「はい？」
そこへ返ってきた返事は
「殺し合いに話し合いは不要だ」
「ッ！」
冷静な声とは裏腹に恐ろしい勢いで銃弾を放ちながらマキへ突っ込むルイスだった。
「主に褒められることを想像していたら少し油断したようですねッ……！　我ながら情けない」
すんでのところで放たれる弾丸をかわしながらマキは迎撃のためにスコーピオンから弾丸を放つ。
至近距離で弾丸を発しながら格闘戦を演じる様は異様なものだった。
片手に握られた互いの銃で相手の動きを制限し、反対の拳や蹴りで仕留める。
そして打撃で動きの鈍ったところに銃弾を叩き込む。言葉で表すのは簡単だが、それは想像を絶するものだった。
片方の銃を失ったマキもこの戦法に切り替えている。
だが、普段二丁拳銃を主体とした戦い方を得意とするマキはルイスとの技術の差が明確になってしまう。
それを意識したマキは勝負を急ぐ。
「黙れ。話しなど不要」
独り言とも取れるマキの喋りが気に入らないのか、それすらも否定するかのようにルイスは弾丸を放つ。
（先ほどまでとは別人……まさか）
体中から地を吹き出させながらも止まることのないルイスの姿にマキはひとつの可能性に思い当たる。
「そうか……そうですかッ！　感情が消えているんですねッ！」

だが、その言葉に反応したのは当のルイス本人ではなくゴミ箱の後ろに隠れこれまで何とか耐え抜いていたセシルだった。
ゴミ箱の陰から二人の戦いを覗きながら、今しがたのマキの発言を考えている。
（ルイスくんの感情が消えたッ！？　さっきあと五年はあるって言ってたのに！）
そんなまきの様子を視界の端に映したマキは戦いを続けながらもセシルに話しかける。
「そんな驚くようなことじゃないんですよ、お姉さん」
「えっ！」
まさか戦いの最中に話しかけてくるとは思っていなかったセシルは驚きの声を上げた。
「ルイスさんの記憶はただの残滓に過ぎません。ということは本来はすでに存在していないものなんですよ」
「すでに存在していないもの……」
銃弾の音にかき消されてセシルの声が聞こえないのかマキは一方的に話し続ける。
「ですから、ときおりこうして残滓が消えて本来の状態に戻るんですよ」
それは、と前置きしてからマキは言う。
「もはやただの人形ですね」
「ッ！」
その言葉をセシルは否定したいが、確かに今目の前で繰り広げられている戦闘を見ればその言葉が真実であることが分かる。
マキに対して手加減することも、マキの発言に怒ることも、ましてや痛みで顔を引きつらせることも無い。
ルイスの顔からは一切の表情というものが抜け落ちていた。
「生きた殺戮人形……。感情が消えたときのルイスさんは戦場でそう呼ばれていました」
「……そんな」

「戦闘中に会話は不要」
話し続けるマキに対しルイスの猛攻はさらに苛烈さを増していた。
一丁しかないはずのデザートイーグルから放たれる弾丸の数はその装弾数以上のものとなっていた。
ルイスのリロードはもはやセシルの目には追えないほどだった。
「クッ！　さすがにこれ以上喋っている余裕はありませんね！」
言いながらルイスの一瞬の隙を見てマキは後方に下がる。
「次で終わりにしましょう」
「……」
傍から見ているセシルにもこの戦いの終わりが近づいていることが分かった。
人形と人形の舞踏劇。その幕切れはどんなものか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2338z/

群島世界のセシル

2012年1月14日21時45分発行